fkobeEarthquake30thAnniv.pdf

阪神淡路大地震３０年　神戸の記憶

神戸新聞の記事切り抜きなどより

阪神淡路大震災から30年 神戸では行事が色々行われています。 2025.1.17.
でも、思いは人それぞれですが、忘れえぬ記憶

1995年12月 最初のルミナリエの灯がともった時の喜びも忘れない

阪神淡路大地震30年　神戸の記憶　　1995.1.17.阪神淡路大地震

1. 神戸新聞 朝刊コラム 正平調より
   「 ボランティアは押しかけていい。迷惑をかけてもいい。
   その何倍もいいことをすればいい。来てくれただけで、本当に喜ばれるのだから」ほか
2. 文珍さんの落語的見聞録 １月「助け合う気持ちと行動」神戸新聞朝刊連載より転記　2025.1.16.
3. 震災復興に重なる 町工場の底力 小関智弘著「春は鉄までが匂った」
   <経済小説の迫真 同時代の光と影>(33)神戸新聞 １月15日夕刊特集 より転記

https://infokkkna2.com/ironroad2/2025htm/2025mutsu/fkobeEarthquake30thAnniv.pdf

---

阪神淡路大震災から30年 神戸では行事が色々行われています。
でも、思いは人それぞれですが、忘れえぬ記憶。
神戸須磨に住む私は 地震発生時には、アメリカに海外出張中。
サンフランシスコのホテルの TV 画像に次々と映し出される映像を食い入るように見ました。

幸い四国にいた娘と連絡が取れ、神戸にいる家族は元気でいることが分かり、 自宅に戻ったのは1週間後。
JR 須磨駅から北へ 被災した家が立ち並ぶ街の真っ暗な坂道 物音ひとつしない道を自宅にたどり着いた記憶は鮮烈。
そして翌朝 須磨・神戸の街の状況を食い入るように眺めましたが、まったくカメラによう収めず。
そして、その12月 ルミナリエの光の環がともった時の感激も忘れない。
また、私の幼馴染が営む生田神社前の串焼きの店も震災、奮闘する仲間の姿に、次々と仲間が駆け付け30年。
そんな仲間の会も30年。 この19日には”お互いよくぞここまで”の思いを込めた会に。 思いは人それぞれ
でも80歳になった今 仲間の元気を応援歌に 本当によくぞここまでの思いもひとしおです。

2025.1.18. From Kobe Mutsu Nakanishi

1. 神戸新聞　朝刊コラム　正平調より　神戸淡路大震災　神戸の記憶

◆「ボランティアは押しかけていい。迷惑をかけてもいい。その何倍もいいことをすればいい。来てくれただけで、本当に喜ばれるのだから」。昨年、能登でも同じ言葉を聞いた

正平調

つかみどころのない問いと知りながら、聞いてみた。震災30年で私たちが学んだ最も大切なものは何でしょう？◆神戸大名誉教授、室崎益輝さんの即答を忘れることができない。「それは市民社会です」。国や自治体、個人が防災力を高めること。そのための仕組みや予算を充実させること。それ以上に大切なものがある。そう語る室崎さんに迷いはなかった◆市民社会とは実に幅の広い概念だが、私たち一人一人の善意が自然に集まって形になり、支え合う社会のことだろう。その寛容さと柔軟さは、この30年で育ったろうか◆いや、社会は逆に不寛容と硬直に向かっているのではないか。それが室崎さんの心配事だった。能登半島地震では心の底から自然とわきおこる善意にブレーキをかけるような「ボランティア迷惑論」が広がった◆さかのぼれば、東日本大震災の時にも同じことが起きた。交通渋滞を招き、救援の邪魔になる。宿泊場所がない。素人には危険…。これも室崎さんの言葉から。「ボランティアは押しかけていい。迷惑をかけてもいい。その何倍もいいことをすればいい。来てくれただけで、本当に喜ばれるのだから」。昨年、能登でも同じ言葉を聞いた◆阪神・淡路大震災30年が近づく。この話はあすも続ける。　2025・1・15

◆公平、理屈、効率といった「官」の論理にとらわれず、必要があれば行動する。
ボランティアから生まれた思想　が社会のありようを変える。この熱源を消　したくはない
柔軟で活気のあ る自由な社会は強く、優しい。　2025.1.16.

正平調

阪神・淡路を代表するボランティアといえば…と考えると、大勢の顔やグループが思い浮かぶ。30年がたつ今もあちこちの被災地で支援を続けている。その気概と持続性が「市民社会」の土を耕し、種をまき、木を育てるのだと感じる◆やっと、というべきか、政府は昨年、ボランティアに必要な費用の一部を支給する方針を示した。活動は無償でも、駆けつけるにはお金がいる。被災地が遠いほど足が遠のくのは当たり前だ。新たな助成の仕組みが市民社会の肥やしになればと切に願う◆ボランティア割引制度の導入をずっと国に求めてきたのは、ひょうごボランタリープラザの前所長、高橋守雄さんだ。仲間と街頭で署名を集め、国に届けた。制度がないなら作ればいい。時間はかかっても前へ◆いまも神戸の市民団体に語り継がれる言葉がある。「言われてもしない。言われなくてもする」。震災から間もないボランティアをまとめた牧師草地賢一さんが残した◆公平、理屈、効率といった「官」の論理にとらわれず、必要があれば行動する。ボランティアから生まれた思想が社会のありようを変える。この熱源を消したくはない◆「災害救援はジャズのように」と表現した人もいる。柔軟で活気のある自由な社会は強く、優しい。　2025・1・16

◆遠く離れた町で故郷の被災に心を痛めた人、リュックを担いで駆けつけた人、語り部の方の話や授業、職場の研修で学んだ世代。震災に寄せる思いは人それぞれ。
それでいい、それがいい　これからも寒い朝には目が覚めるだろう。
31年になっても、40年が過ぎても。　そして、込み上げるものを抱きしめる。　2025.1.17.

正平調

寒い冬の朝、まだ暗い時間にふと目が覚めることがある。何時だろう、と枕元の時計に目をやる。それからあの時刻になるのをじっと待つ。午前5時46分。大きな揺れを体感した時刻が巡ってくるのを◆「年が明けるとそんな朝が増えるような気がします」「もう30年ですね」。そう言って、阪神・淡路大震災の追悼行事で隣り合わせた人とうなずき合ったのは、今月のこと◆この1年、朝刊連載「震災ダイアリー」の切り抜きに精を出した。写真と記事を通して1995年の出来事に思いをはせる。弔いと別れ、生活の立て直し。あの日々は忘れない、というより忘れられない◆先日、神戸出身の作家砂原浩太朗さんが自らの体験を基に小説「冬と瓦礫」を出した。震災の当事者ではないことへの後ろめたさ、やましさが執筆の原動力という。取材記事で語っている。「災害を風化させないためにはいろいろな視点が必要では」◆遠く離れた町で故郷の被災に心を痛めた人、リュックを担いで駆けつけた人、語り部の方の話や授業、職場の研修で学んだ世代。震災に寄せる思いは人それぞれ。それでいい、それがいい◆これからも寒い朝には目が覚めるだろう。31年になっても、40年が過ぎても。そして、込み上げるものを抱きしめる。　2025・1・17

2. 文珍さんの落語的見聞録 １月　　神戸新聞朝刊連載より転記　2025.1.16.

「助け合う気持ちと行動」

神戸新聞NEXT

文化

神戸新聞

2025年（令和７年）
1月16日
木曜日

神戸新聞社
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7

落語的見聞録

桂文珍

助け合う気持ちと行動

阪神・淡路大震災から30年、ついこの間のような気もするし、遠い昔のようにも思う。

あの日、神戸の自宅にいて、新幹線で東京に行く予定だった。寝ているとドーンという音、グラグラと大きな揺れに飛び起き、外に寝間着のまま出た。妻は飼っていた猫、名はゴゴロウ（桂小五郎にあやかってつけた）が暗いうちから変な鳴き方をするのでおなかがすいたのだと、屋外で餌を与えていた。暗い中、２人ともに助かった。

少しずつ明るくなり、街を見ると、あちらこちらから煙が上がって炎も見えた。火事だが消防も動けない状態。わが家も半壊、やがて危険なので入らないようにと、入り口には赤い紙が貼られた。全壊と同じことだった。

阪神高速神戸線は横倒し、でも寄席の出番があったので、ミニバイクで難波まで通ったが、1年で一番寒い時期、鼻水が凍った。橋を渡ることに被害は少ない様子。つらかったが高座から見えるお客さまの笑顔に癒やされた。

そして全国からの援助、誠にありがたく、ボランティアという言葉が定着し始めたのもあの震災から。以降も東日本大震災、能登半島地震と、いつ何があっても不思議でないこの国、大切なのは助け合う気持ちと行動だと、しみじみ思う。

落語「富久」では、幇間の久蔵、酒癖が悪く、得意先の芝の旦那をしくじる。くさっていると、知り合いに富くじを勧められ「松の百十番」の札を買い、神棚にしまって当たるよう祈って寝る。夜中に半鐘の音、火事はしくじった旦那の家の方、すわ一大事！と、駆けつけ、手伝いをする。幸い類焼を免れ、よくやってくれたと旦那から出入りを許され、ごちそうになり酔っぱらって寝ていると再び半鐘の音。今度は自分の家の方角、戻ると全焼だった。

ある日、八幡様の前を通ると、ナ、ナント、松の百十番が千両当たっている…。でも火事で札は焼けてしまった。落胆していると、町内の頭が「留守中、布団と釜、それに大切にしていた神棚を出しといてやったから取りに来い」。行くと、神棚の中にお札が…あった！と、なかなかいい噺。

ちなみにわが家の猫は地震から10日後に煙せて帰ってきた。命の「恩猫」、名前を木戸孝允に変えたが、呼んでも返事はしなかった。

（かつら・ぶんちん＝落語家）

＝次回は2月20日＝

神戸在住の桂文珍さんも阪神淡路大震災への思いもひとしお。　一緒に暮らしてきた「猫」のおかげで、ご夫妻ともども半壊の家から抜け出せ、助けられたという。　そして、当時の状況もありありと。

落語は「富久」　酒癖の悪い太鼓持ち久蔵がしくじった旦那の家が火事。一大事と駆け付け、家に帰ると我が家は全焼。勧められて買っていた富くじが当たっていたのに、家が全焼でバーに•。　落胆していると町内の頭が家から家財と共に富札を置いた神棚も外にだして保管してくれていて、千両の大当たり。

みんなの助け合う心が自分にも戻ってくる

という古典落語の名作。

神戸淡路大震災 1995.1.17.の特集「鉄のものづくり」の記事に目が留まりました

＜経済小説の迫真　同時代の光と影＞（３３）　神戸新聞　１月１５日夕刊特集　より転記

3. 震災復興に重なる　町工場の底力　小関智弘著「春は鉄までが匂った」

心に響いたものつくりの言葉「ものつくりの魂には　永久に自足するということがない　」

「消費に特化した町は どこか薄っぺらい。強いのは生産機能のある町。多様だからこそ変化に対応できる」

新聞記事の中にある 生きた言葉の数々が懐かしい　衰退する技術立国日本に必要なもの

ものつくりの魂「現場主義・知識と知恵　技能・技量」への理解

街歩きの途中　現場の匂いがなつかしく工場の匂いに足を止める 2025. 1. 17.　Mutsu Nakanishi

経済小説の迫真
―同時代の光と影―
ものつくりの魂には永久に自足するということがない
震災復興に重なる 町工場の底力
小関智弘著
春は鉄までが匂った
トレンド

工場で取材する小関智弘さん。
生産にまつわるエピソードを
丁寧に聞き取る
＝２００７年８月、大阪市都島区

詩的なタイトルに惹かれてこの本を手に取ったときのことを思い出す。
旋盤工として働きながら、その哀歓を書き続けた職人作家の世界がそこにあった。町工場に生きる人々を取り上げたルポの体裁だが、エピソードをすくい上げるまなざしと作家の想像力が相まって、ものづくりに打ち込む人々を主人公にした私小説のような味わいを醸し出している。

この本を手に兵庫運河（神戸市兵庫区）沿いに立つ「ものづくり工場」を訪ねた。鉄骨造りの建物が計４棟。阪神・淡路大震災から３年後の１９９８年、神戸市が建てた日本最大級の公営賃貸工場だ。当初の神戸市復興支援工場、ものづくり復興工場から現名称に名を変え、現在、中小零細１００社余りが居を構える。

「金属を削る、磨く。革を裁つ、縫う」ここに来れば町工場ならではの音や匂いを感じ取ることができる。多くの人が震災で自宅や工場を失った。いずれも職住近接か職住一致だったから、被害は暮らしを大きく揺さぶった。

被災後は同市西区などにできた仮設工場で急場をしのぎつつ、ここにたどりついた人もいる。どこかの町を歩いていて、小さな工場をみかけたら、ちょっと立ちどまって、そこで飛び散っている火花の色を心に写してみてほしい。その火花の先の微妙な色の変化や、花の散り具合にも心をかけて、鉄や鋼でものを作っている人がいることを、そんな人たちの悲喜こもごも、少しでも語り得たら、わたしはうれしい。

〈本文引用、抜粋・省略。以下同〉

■ 職人の「暗黙知」

小関智弘は東京都大田区で半世紀にわたって旋盤工として働いた。
働きながら同人誌「塩分」で小説の腕を磨いた。
「文学少年の尻尾を引きずっていたわたしは、鉄を削るという労働の初体験とその仕事をめぐる
さまざまな人間模様を、いつの日か小説に書いてみたいという思いを抱きはじめた」
小関「働きながら書く人の文章教室」）。

経済学や経済ジャーナリズムが産業構造を上から見ているのであれば、下から、町工場から日本経済を見る視角で小関は作品を発表していく。
経済社会は高度成長からバブル崩壊をへてＩＴ（情報技術）を軸に大きく変容していった。しかし、どれだけ IT が発達しても、熟練の職人が持つ暗黙知、豊かな世界を完全にマニュアル化することはできない。

「技能は単なる手業（てわざ）ではなく、難局を乗り越える問題解決能力だ」。小関の言葉がよみがえる。
それを支えるのは、町工場から大工場までさまざまな現場に宿る、ものづくりの魂にほかならない。

商魂なら利益をあげることで自己完結してゆくだろうけれど、
ものつくりの魂には永久に自足するということがないでしょう。
現実とのズレを、どう克服するのか。わたしは聞いた。
設計の堀沢さんは熱っぽく語った。小さな工場でよい機械を生み出すためには、たくさんの工場の協力が必要だ。
電気関係、震動対策、機械加工の精度対策と太い指を折りながら、
「いいものを作ろうとする仲間が集まれば、きっと出来る」。
ものづくりの魂は、決して自足してはいない。

■　鋼の腹のなかでー

2008 年９月、ものづくり工場（当時はものづくり復興工場）の１０周年の会があり、小関が講演に立った。
大震災で壊滅的な打撃を受けた神戸の惨状と、東京大空襲で灰じんに帰した東京・大森の様子を重ねつつ話した。
「どちらも見事に復興を果たしたのは、ものづくりの底力があったから」。
地域に根差した町工場が集積し、多彩な製品を作り出す。
「消費に特化した町は どこか薄っぺらい。強いのは生産機能のある町。多様だからこそ変化に対応できる」
工場の取材に同行したことがある。
ラインに入り、穏やかな表情で話に聞き入り、メモ帳に書き込む。温顔、決して高ぶらない。
旋盤工として長く鉄と向き合ってきた経験からか、不思議な信頼感が生まれる。
「現場でしか聞けない言葉があるんだよね」。
ゆっくりと確かな足取りで人生を歩いてきた職人の姿がそこにあった。

著書にサインをお願いした。「鋼の腹のなかで考える」
円安、原材料高、後継者難…。ものづくりの先行きについて悲観論が語られて久しい。
だからこそ、机上ではなく、鋼の腹の中で考えたい。
表題作「春はー」のタイトルの意味を語ってもらおう。
前の晩に雨に打たれた屋外の鉄屑（てつくず）が、赤錆（さ）びながら太陽を浴びれば、
酸化熱を発しながら湯気を立てる。
それが甘酸っぱく匂うのは工場の人間なら誰でも知っている。（敬称略）

（特別編集委員・加藤正文）

【こせき・ともひろ】１９３３年東京都生まれ。５１年から２００２年まで東京都大田区内の町工場で旋盤工として働く。小説、ノンフィクション作品を多数発表。「大森界隈（かいわい）職人往来」で第８回日本ノンフィクション賞。「ものづくりに生きる」「仕事が人をつくる」など著書多数。
本作品は１９７９年７月刊。ちくま文庫、現代教養文庫

知らなかった本　今 図書館貸出し　Waiting 中　　神戸新聞　2025 年 1 月 14 日夕刊特集より　転記